200400387B

厚生労働科学研究研究費補助金

子ども家庭総合研究事業

10代の女性の人工妊娠中絶減少にむけての支援モデルの構築

平成15年度～17年度　総合研究報告書

主任研究者　新道　幸恵

平成18（2006）年　3月

目　　次

Ⅰ．総合研究報告

10代の女性の人工妊娠中絶減少にむけての支援モデルの構築---------- 1

新道　幸惠

（資料）---------- 33

（資料1）　青森県健康福祉部　こどもみらい課：青森県における思春期保健をめぐる現状と取り組みの方向、10代への性教育に関する連携を目標とした教育・行政・専門機関関係者の懇談会資料

（資料2）　10代の性に関するアンケート

（資料3）　高橋佳子、益田早苗他：青森県における10代男女の性意識・性行動の実態と課題（第1報）―性交・人工妊娠中絶の経験を中心に―、第45回日本母性衛生学会発表スライド

（資料4）　玉熊和子、益田早苗他：青森県の10代男女の性意識・性行動の実態と今後の課題（第2報）―性の指導内容、性の相談へのニーズ―、第45回日本母性衛生学会発表スライド

（資料5）　高橋佳子、益田早苗他：青森県の10代男女の性に関する悩み・意見について―自由記述内容の分析結果から―、第3回青森県立保健大学学術研究集会発表ポスター

（資料6）　新道幸惠：10代の妊娠中絶減へ支援　包括ケアシステムの構築、教育医事新聞、2005.3.25

（資料7）　電話相談普及カード

（資料8）　ピア・カウンセリングサークル（SMILE）　小冊子

（資料9）　ピアカウンセリングルームについて、東奥日報、2005.1.19

（資料10）　電話相談について、東奥日報、2005.1.21

（資料11）　電話相談について、朝日新聞、2005.1.28

厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)

総合研究報告書

10代の女性の人工妊娠中絶減少にむけての支援モデルの構築

主任研究者　新道　幸惠　青森県立保健大学学長

研究要旨

青森県の１０代女性の人工妊娠中絶が高いことに着目し、それを減少させるための包括的ケアシステムモデルの構築を目的に３年間研究をおこなった。まず最初に、既存の統計資料の分析、調査研究によって実態を把握した。その結果、１０代の男女の性意識・行動は東京都内の調査結果と比較して、活発であることが明らかになった。そこで、それらを減少させる対策を検討するにあたって、中学校の教員及び養護教員の取り組み、県や市の取り組みや関係者の意識を、既存資料や懇談会、ワークショップを通して把握した。また、本研究会のメンバーで電話相談員の養成と、電話相談の開始、ピア・カウンセラーの養成とその活動の開始、中学校生徒や保護者を対象にした性教育、マスコミを活用しての思春期の性意識や行動のリスクに関する啓蒙活動、人工妊娠中絶後のカウンセリングによるリピーターの減少活動、若年妊婦のマザークラスの開催により母性形成支援活動、等を実施した。それらの活動を通して、本研究の目的とした包括的ケアシステムモデルの構築を行った。即ち、上記の関係機関や関係者と大学の教員が連携、共同するための中核的な組織を編成し、関係機関や関係者の活動を相互に支援しながら活性化する活動を行う組織であり、活動を包括的ケアシステムモデルと位置づけ、その組織を発足させることが出来た。

分担研究者

佐藤正昭	青森公立大学教授
中村由美子	青森県立保健大学教授
益田早苗	青森県立保健大学助教授
高橋佳子	青森県立保健大学助手
佐藤　愛	青森県立保健大学助手
高橋司寿子	青森県立保健大学助手
玉熊和子	秋田看護福祉大学講師
長澤一磨	青森県総合健診センター医師
溝江好恵	ハローベビー助産院院長
権　美子	日本助産師会青森県支部事務局

A.研究目的

本研究は、10 代の女性の人工妊娠中絶を減少させるために、中学生とその保護者・教育者を対象に性教育の支援を行い、望まない妊娠を減少させること、さらに出産を選択した 10 代への支援について行政や地域関係機関との連携を含む包括的なケアシステムのモデルを構築することにある。専門家による性教育やサポート、ピア・カウセリング、子育て支援等のケアシステムを構築し、10 代の女性が望まない妊娠や人工妊娠中絶・性感染症の罹患率を低下させ、性の健康を守ることを目的とする。

B.研究方法

1. 青森県における人工妊娠中絶の実態の把握を目的とした調査

1）統計資料から

平成 16 年度保健・衛生行政報告、平成 13 年度母体保護統計 ｩ 報告、「青森県における思春期保健をめぐる現状と取組の方向」（平成 18 年 1 月 10 日「10 代の性教育に関する連携を目指した教育・行政・専門機関関係者の懇談会」における青森県健康福祉部提供資料）よりデータを収集した。

2）10 代の男女を対象にした質問紙調査

（1）対象：青森県内の 10 代男女

（2）調査内容

家庭での性の話題の有無、性教育の受講の有無、性についての知識の有無、性に関する直接或いは間接(友人の)経験の有無、性行動や体験、性の相談者や機関など。

（3）調査方法

自己記述式質問紙を県内の大型スーパーの出入り口で直接手渡し方式で配布し、郵送にて回収した。

（4）調査期間

平成 15 年 12 月 28 日～平成 16 年 2 月

15日。

(5) 調査分析方法

統計ソフトSPSS10.0Jを用いて集計した。性に関する悩みや意見の記述部分については、内容分析の方法を用いて要素を抽出しカテゴリー化を行った。

2. 思春期の性に関する活動機関及び関係者間の連携を目的にした活動

1) 中学校教諭対象のワークショップ

青森市教育委員会の協力を得て、市内20校のうち12校の保健体育及び養護教諭計12人を対象に、平成15年9月10日、青森県立保健大学にてワークショップを開催した。

2) 中学校保護者とのワークショップ

青森市教育委員会の協力を得て、市内20校のうち中学校ＰＴＡ役員の方々を中心に、11校から計20人を対象にして、平成16年1月20日、青森県立保健大学にてワークショップを開催した。

3) 教育・行政・専門機関関係者の懇談会

支援モデル構築において、教育・行政・専門機関の連携を目指し2回開催した。平成17年8月19日（第1回）にパネラーを含む関係機関13名（医師2名、行政4名、保健師1名、病院看護部長1名、教諭2名、養護教諭3名）と研究者と共に、また平成18年1月10日（第2回）には関係機関12名（医師1名、行政3名、保健師2名、中高校校長2名、養護教諭2名、PTA保護者1名、助産師1名）と研究者と共にそれぞれの立場からのプレゼンテーションおよび意見交換を行った。

4)「10代の性」ワークショップ

10代への性教育のあり方について社会全体をあげた取り組みを実現する為、一般にむけた意識の高揚を図る目的で、平成17年10月1日、参加者37名（教育関係者15名、行政関係者12名、医療関係者5名、警察関係者1名、看護学生5名）と研究者と共にワークショップを開催した。

3. 10代の人工妊娠中絶を減少させるための活動の実施

1) 性教育

(1) 中・高校生対象

平成16年度：対象と方法

中・高校生を対象に青森市を中心とした県内15ヵ所で本研究メンバーが、対象校と調整し、「思春期の健やかな性と生」「思春期の性と健康」「すごい確率で生まれた君たちは素晴らしい」「思春期の心と体」「思春期に必要な性感染症と避妊の知識」「思春期の性と性感染症」「思春期の性～性感染症と人工妊娠中絶」等をテーマに性教育を60分間行った。性教育の実施対象の内訳は、中学生：10件（2年生：2件、3年生：3件、全校：5件）、高校生（1年生）：1件であった。

そのうち、中南地区高等学校A校の生徒110名を対象に行った「高校生に必要な避妊と性感染症予防の知識」をテーマにした性教育終了後、自記式アンケートを行い、性教育の内容について評価した。

平成17年度：対象と方法

小・中・高校生を対象に青森市を中心とした県内15ヵ所で本研究メンバーが、対象校と調整し、「大切な性について考えよう」「思春期の性」「すごい確率で生まれた君たちは素晴らしい」「思春期のすこやかな性と生」「生命の尊重～自分の体を守ろう～」「命の尊さ」「たいせつないのち」「知っておこう！性のこと―自分も相手も大切にするために―」「思春期の性の現状と正しい性のあり方」「大事な話～「命」のこと、「愛」のこと～」「思春期に必要な性感染症と避妊の知識」等をテーマに性教育を60分間行い、そのうちB校において終了後自記式アンケートを行い（1～2年生対象、3年生対象）性教育の内容について評価した。

性教育の実施対象の内訳は、小学生（高学年）：2件、中学生：12件（1年生：2件、2年生：3件、3年生：3件、1～2年生：1件、全校：3件）、高校生（1年生）：1件であった。

(2) 保護者対象

平成16年度：対象と方法

「思春期の子育て」「思春期の子どもたちの性」と題した講演を以下の対象者に実施した。

①青森市内中学校C校の保護者80名
②西北五地区中学校D校の保護者40名
③青森市E施設に参集の市内中学生の保護者10名
④青森市F施設に参集の市内中学生の保

護者 16 名

講演終了後、内容についてのアンケートやフリーディスカッションを行い、内容の評価を行った。アンケートの質問内容は「性教育」「思春期の子どもの性行動の特徴」「性感染症」「家族としての対応」「親としての役割や対応方法」への理解を問う内容であった。

平成 17 年度：対象と方法

青森市を中心とした県内の中・高校生の保護者を対象に、「思春期の性の現状」「思春期子育て講座―親としての思春期の性の支援」等と題した講演を 4 ヵ所で実施した。

(3) 医療保健従事者・養護教諭対象

平成 16 年度：対象と方法

青森市を中心とした県内の各専門家への性に関する講演を 3 ヵ所で実施した。対象者の内訳は、高校教諭：1 件、保健師：1 件、養護教諭：1 件であった。テーマはそれぞれに合わせ、「思春期の健やかな『性』と『生』」「生と性の教育を効果的に行うために～10 代の性行動の現状と課題」等のテーマで行った。

平成 17 年度：対象と方法

青森市を中心とした県内の各専門家への性に関する講演を 6 ヵ所で実施した。対象者の内訳は、養護教諭：3 件、看護師・助産師：1 件、社会福祉主資格受講生：1 件であった。

テーマはそれぞれに合わせ、「セクシュアリティ」「思春期の健康教育―性教育を中心に―」「性的虐待とＤＶ」等のテーマで行った。

その他、県内の大学 1 年生を対象にし、2 ヵ所で「大学生の性感染症および人工妊娠中絶の実態～これだけは知っておきたい性の知識～」「思春期のすこやかな性と生」のテーマで講演を 90 分行った。

2) ピア・カウンセリング

ピア・カウンセラー養成の第 1 段階は、平成 15 年 2 月に助産課程学生による性教育に関するピア・サポートグループの編成と活動が母体となっている。本研究が開始する以前に活動していたため、ピア・カウンセラーではなくピア・サポーターと呼び活動を開始した。その 1 年半後となる平成 16 年 9 月から本格的なピア・カウンセラーの研修会が開始され、養成が開始され、現在までに約 30 名の養成を行なった。

(1) ピア・カウンセラーの養成

①ピア・カウンセラー養成の目的

10 代男女の性に関する主体的な自己決定をサポートするために、『仲間教育』や『仲間相談』を企画・運営・実践できる支援者（ピア・カウンセラー）を養成することを目的とし、以下の 3 点を目標にした。

a.ピア・カウンセリングの目的・目標が理解できる。

b.ピア・カウンセラーとして対象者のニーズをアセスメントすることができる。

c.「仲間教育」や「仲間相談」の企画・運営・実践ができる。

②養成カリキュラム

本学 1 年後期科目「性とセクシュアリティ（1 単位 15 時間）」を履修した学生からメンバーを募集し、本学での「ピア・カウンセラー研修会（1 単位 15 時間）」とあわせて 2 単位を受講した者をピア・カウンセラーとして認定した。研修会は、本研究メンバーが企画運営し、平成 16 年 9 月、平成 17 年 2 月、平成 17 年 9 月、平成 18 年 2 月と計 4 回開催した。（具体的な内容は表 1 及び表 2 を参照）

表 1 「性とセクシュアリティ」講義内容
（本学学生　選択科目）

科目のねらい・目標

人間の性は「人間が生きることそのものである」という基本的概念のもとに、生物学的な性、生殖としての性、社会的性差、性意識の側面から性を理解する。さらに、人間のライフサイクルにおける性の発達、性意識や性行動の特徴について教授し、自己の性的アイデンティティの確立を促すとともに、看護と性についての基本的な知識を理解する。

授業内容

1. 人間の性とは何か：性の概念と諸側面、性の意識、性科学とは何か
2. 人間の性の特徴：人間の性反応、脳と性差
3. ライフサイクルと性：乳児期、学童期、思春期、青年期、成人期、老年期の発達課題と特徴
4. 性意識と性行動：思春期以降の性意識・性行動の特徴、リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ
5. 性の諸問題：望まない妊娠と人工妊娠中絶、性感染症、性の商品化、性暴力、性の権利
6. 少数派（マイノリティ）の性：老年期、障害者、同性愛、性同一性障害
7. 看護（援助者）と性：患者と性、看護職と性

表2 「ピア・カウンセラー研修会」プログラム

1日目	1. ピア・カウンセリングとは何か：「性における自己決定の支援」 2. 自分の性をみつめる 3. 10代の妊娠と人工妊娠中絶 4. 避妊方法・性感染症
2日目	1. 恋愛と性（異性とのコミュニケーション） 2. 今までの活動の振り返りと今後の課題（グループワーク） 3. ロールプレイとディスカッション

(2) ピア活動の実践

①県立A高校「性教育講座」グループワーク担当（高校1年生男女対象）

平成16年7月及び平成17年7月と2年連続でグループワークを実践した。「性教育講座」講演後にピア・カウンセラーがグループワークのファシリテーターを努めた。内容は、模型を用いてのコンドームの装着法のデモンストレーションを行い、その後質問や感想を聞いた。終了後自記式アンケートを行い、ピア・カウンセラーの関わりについて評価した。

②ピア・カウンセリングルームでのピア活動

a.大学祭でのピア・カウンセリングルーム

本学大学祭で性についてのポスターや避妊具などの展示、および個別カウンセリング専用のブースを設け、参集した10代の男女に対して、性に関する知識や情報の提供を行った。（平成16年10月および平成17年10月に実施）

b.学外でのピア・カウンセリングルーム

平成17年1月16～22日(17:00～21:00)、青森市男女共同参画センター内にピア・カウンセリングルームを1週間開設し、参集した中高生7名に対して、ピア・カウンセリングを行った。ピア・カウンセリングルームは、ポスターや避妊具などの展示や独自に作成したパンフレットの配布を行うブースと、個別相談を希望する来訪者のための専用ブースを設けた。1日7～17名のピア・カウンセラーが待機し、1回の来訪者に対して3～4名のピア・カウンセラーが対応した。

③その他

a.活動用冊子「Teens' Love　－大切にしよう自分の性－」の作成

ピア・カウンセラーのメンバーが主体となって、ピア活動の際に活用する冊子を作成した。B6版16ページ。内容は「恋愛とセックス」「性感染症」「性の悩み」「避妊法」「デート DV」等であり、10代の男女及び県内の性教育関係者に配布し活用している。

b.H17年7月県立G高校学祭にて相談・展示ルーム開設（1日）

県立G高校所管の保健所保健師から依頼があり、資料展示とデモンストレーションブースを設け、性感染症や避妊についての資料・情報提供、グループディスカッション等を行なった。（高校生約20名対象）

c.H18年1・2月　男女共同参画市民企画展参加　資料展示（1週間）

3) 電話相談

「電話相談員養成講座」を開催し相談員の養成を行なった。養成講座は平成16年10月及び平成17年9月の2回開催し、相談員9名を養成し、平成17年2月から電話相談事業を開始した。

(1) 電話相談員の養成

目標を、「思春期にある子どもの特徴や性行動について理解した上で、対象者の持つ健康問題をアセスメントし、電話を用いて問題解決のための援助ができる電話相談員を養成する。」として、「電話相談員養成講座」を開催した。日本看護協会青森県支部の協力を得て県内の看護職者に募集をし、9名が受講した。講義内容は、表3のとおりである。現在、養成された電話相談員のうちの6名と、本研究メンバー7名が相談員として活動している。また、電話相談員のスキルアップを図るため、実際に相談を受けた事例についてメンバー全員で事例検討を行った。

表3 電話相談員養成講座プログラム

1日目	1. 電話相談の基礎知識 2. 電話相談の実際とコミュニケーション技術 3. 10代の妊娠と人工妊娠中絶 4. 性感染症の動向
2日目	1. 10代の性行動・性意識の特徴 2. 避妊法 3. セクシュアリティ 4. 思春期の性の支援

(2) 電話相談事業

①広報活動

電話相談を始めるにあたり普及活動として、地元新聞・商業紙への掲載と、宣伝用カードの作成を行い、青森市男女共同参画をすすめる会・市内中学校保健室・産婦人科外来・保健所等でカード（資料参照）を配布した。

②電話相談事業

平成17年2月より、本学内に開設した電話

相談室において、週 1 回（火曜日 17 時～20 時）の電話相談を実施した。

4）人工妊娠中絶後のカウンセリング

（1）目的

人工妊娠中絶を受けた 10 代の女性に、その後の精神的問題や悩みについてカウンセリングを行うことにより、人工妊娠中絶の繰り返しを予防し、10 代女性の心身の健康を保護・増進する。

（2）対象と方法

対象は、協力産科施設から紹介があり、本人の了解の得られた 10 代の人工妊娠中絶後の女性 4 名。

人工妊娠中絶後 7～10 日後に、本研究メンバーによるカウンセリングを、30 分～1 時間行った。なお、その評価は、カウンセリングの内容および終了後のアンケートの結果をもとに行った。

（3）実施期間：平成 16 年 4 月～10 月

5）ヤングママのためのマザークラス

（1）目的

10 代の妊婦及び母親の集いの場を提供し、「親になる準備」ができるよう、また周囲のサポートを活用しながら、子育てしていく方法を考えることができるよう支援する。

（2）目標

①エクササイズやおしゃべりを通して、妊娠中及び産後の不快症状やストレスが軽減できる。

②同じ悩みを共有・解決できる仲間作りができる。

③出産や育児に対する自分の思いや考えを仲間に話すことができる。

④家族及び地域ぐるみでのよりよい子育てについて考えることができる。

（3）対象

10 代の妊産婦（妊娠週数は問わない）。妊婦及び出産後の 10 代～20 代前半の母親も対象として呼びかける。また、パートナーや子どもの同伴も可とする。

（4）方法

①場所；青森市健康増進センター（元気プラザ）健康教室

②期間；平成 17 年 5 月～平成 18 年 2 月

③回数；月 1 回（毎月第 3～4 土曜日の午後 1 時～2 時 30 分まで、1 回 90 分）の計 10 回

④クラスの内容；健康状態のチェック（問診及びエクササイズ前後の血圧・脈拍の測定）エクササイズ 20 分、自己紹介+フリートーク 40 分、質問タイム 30 分で構成する。

4. 10 代の女性の人工妊娠中絶減少のための包括的ケアシステムモデルの構築

青森県及び青森市内の思春期保健活動を行っている中学校教員、中、高校の養護教諭、保護者、医師、助産師、保健師、市及び県の母子保健や学校教育の関係者、大学の教員等との情報交換を行い、10 代の女性の人工妊娠中絶減少のための包括的ケアシステムモデルの構築について議論をする。

5. 評価

（1）目的

本研究における 3 年間の包括的ケアシステムモデルの構築に向けて実施してきた諸活動の成果の指標の一助とすることを目的として、平成 18 年 1 月 30 日～2 月 24 日の期間で質問紙調査を実施した。

（2）対象

実際に教育現場で中学校教育に携わっている青森市内の中学校 23 校（分教室 1 校含む）の教員・養護教諭 661 名であった。

（3）方法

青森市教育委員会の協力を得て、自己記述式質問紙を各中学校に配布し、郵送にて回収した。

（4）内容

対象者の属性（性別、年齢）、性教育にどのような立場で関わっているか、これまでに参加した性教育に関する研修会や講演会の内容、中学生に必要な性教育の具体的内容などとした。

（5）分析

統計ソフト spss13.0j にて単純集計およびクロス集計を実施した。記述内容については、記述された内容から意味の了解可能な最小単位の文節を取り出し、キーワードごとに分類し、集計を行った。

(倫理面への配慮)

研究実施にあたり、本学倫理委員会の承認を得て行った。研究参加に際しては、研究の趣旨・内容等インフォームド・コンセントを十分に行い、事前に研究承諾書を作成し、また、途中で研究協力を断る自由についても文書で説明した。任意参加・匿名で行い、個人を識別できるデータはプライバシーの保護

のため、個人識別情報の削除、匿名化を行い、人権を尊重した。アンケートは任意の回答であることを説明し配布した。

C.研究結果

1. 青森県における人工妊娠中絶の実態

1) 統計資料から

(1) 10代の妊娠および人工妊娠中絶実施率（表4）

平成15年の青森県における10代の出生数の割合は2.3%であり、全国1.7%よりもはるかに上回っている。この状況は、過去5年間継続している。

また、青森県の10代の人工妊娠中絶実施率（15歳以上20歳未満の女子人口千対）は、平成14年は13.6、平成15年は12.7と減少傾向にあるが、全国と比較すると依然として高い実施率である。平成15年2月から平成16年1月までの青森県内の人工妊娠中絶実施総数は3,877件であり、そのうち20歳未満の占める割合は15.1%であった。

表4　青森県における10代の出生率および人工妊娠中絶実施率

年	10代の出生率		10代の人工妊娠中絶実施率	
	青森県	全国	青森県	全国
1999	2.1	1.5	14.3	10.6
2000	2.1	1.6	15.2	12.1
2001	2.1	1.7	16.4	13.0
2002	2.4	1.8	13.6	12.8
2003	2.3	1.7	12.7	11.9

※　資料；人口動態統計、母体保護統計、衛生行政報告より

(2) 10代の性感染症の罹患（定点報告より）

青森県における性感染症のうちのクラミジア感染者数は淋菌感染症・尖形コンジローマよりも感染者数が多く、年齢層では15歳から24歳まで、性別では女性の罹患者が多く、年々増加傾向にある。

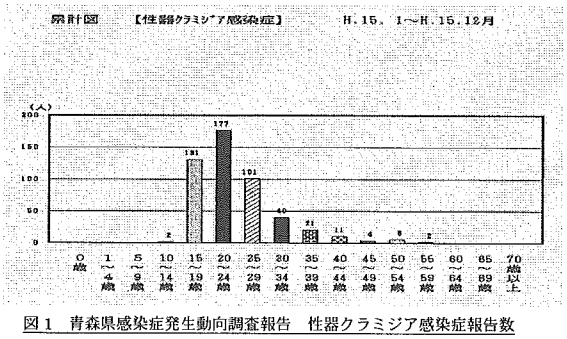

図1　青森県感染症発生動向調査報告　性器クラミジア感染症報告数

表5．定点あたりの平成15年性器クラミジア感染者報告

年齢	青森県					
	総数		男		女	
20歳未満	168	27.8%	26	12.7%	142	35.5%
20-24歳	210	34.8%	57	27.9%	153	38.3%
25-29歳	101	16.7%	39	19.1%	62	15.5%
30-34歳	64	10.6%	42	20.6%	22	5.5%
35-39歳	31	5.1%	17	8.3%	14	3.5%
40-44歳	10	1.7%	10	4.9%	0	0.0%
45-49歳	9	1.5%	6	2.9%	3	0.8%
50歳以上	11	1.8%	7	3.4%	4	1.0%
総数	604	100.0%	204	100.0%	400	100.0%

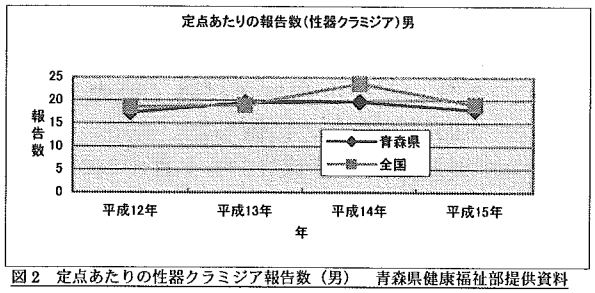

図2　定点あたりの性器クラミジア報告数（男）　青森県健康福祉部提供資料

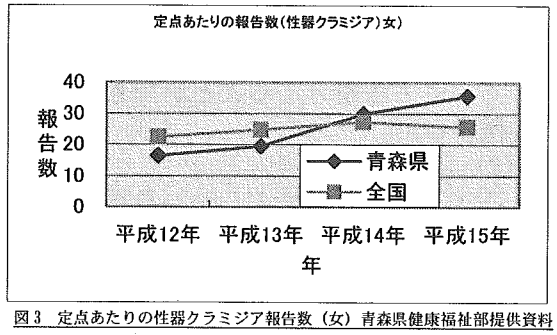

図3　定点あたりの性器クラミジア報告数（女）青森県健康福祉部提供資料

2) 青森県の思春期保健の取り組み

青森県の思春期保健対策関連事業を「わくわくあおもり子育てプラン」（青森県次世代育成行動計画）の中でみてみると、大きく「母性並びに子どもの健康の確保及び増進」、「次世代の親の育成の推進」、「命を大切にする心を育む環境づくりの推進」、「子どもの安全の確保」、「子どもの非行防止と健全な社会環境の形成」の行動計画に分けられ、それぞれの中で思春期保健に関する取り組みがなされている。

「母性並びに子どもの健康の確保及び増進」の中では、「健康教育推進事業」があり、各教育事務所管内に小・中・高等学校1校ずつ推進校を設置し、発達段階に応じた健康教育の推進について調査研究やセミナーが開催されている。また、「学校医等の配置」事

業では、県内 6 地区ごとに各 1 校ずつ産婦人科医を配置し、各校の性に関する講演や相談等に対応し、性に関する指導の充実を図っている。

「次世代の親の育成の推進」としては、「性に関するセミナー」事業があり、性教育の指導の中心的立場にある教員等を対象とした研修を開催し、指導者の資質の向上を図ることもなされている。

また、青森県では、思春期の健康と性の問題に対する総合的・効果的取り組みについて検討するために、平成 17 年 8 月に青森県思春期保健対策検討委員会を設置され、医療・教育・保健・警察・保護者の関係機関が一体となったサポート体制構築を目指している。

3) 10 代の男女への質問紙調査

1,250 部配布し、回収数は 320 部、回収率は 25.6%であった。

(1) 対象属性について

性別は、男子 12.5%(40 人)、女子 87.5%(280 人)であった。

平均年齢は、15.8 歳(±1.83 歳)であった。

学年別内訳は、中学生 38.8%(124 人)、高校生 54.4%(174 人)、その他高校を卒業した者が 6.9%(22 人)であった。

(2) 家庭環境

家庭における「居心地の良さ」については、「非常に良い・少し良い」87.8%(281 人)、「あまり良くない・全く良くない」11.9%(38 人)であった。

家庭で性について親と話合うことがあるかでは、「母親」と「よくある・ときどきある」は 23.4%(75 人)、「父親」と「よくある・ときどきある」は 5.6%(18 人)であった。

(3) 性についての友人からの影響

友達と性について話合うことがあるかでは、「よくある・ときどきある」78.8%(252 人)、「あまりない・全くない」21.3%(68 人)であった。

友達の性の経験は自分より進んでいるか否かについては、「進んでいる」50.6%(162 人)、「同じくらい」25.6%(82 人)であり、「遅れている」6.3%、「わからない」17.2%であった。

(4) 性に関する知識

学校で性に関する授業や指導を受けたかについては、94.4%(302 人)が受けており、中学校で受けたものは 86.3%(276 人)、高校では 84.2%(165 人)であった。

学校における性の授業や指導の内容では、「男女の体のしくみ」「男女の性行動の違い」「月経」「性感染症」「妊娠」と回答したものが約 60%以上であった。また、これから更に知りたい内容では、「SEX」「愛とは何か」「性感染症」「妊娠」「避妊法」「人工妊娠中絶」「異性との交際の仕方」「男女の性行動の違い」「出産」が 30%以上であった(図 4)。

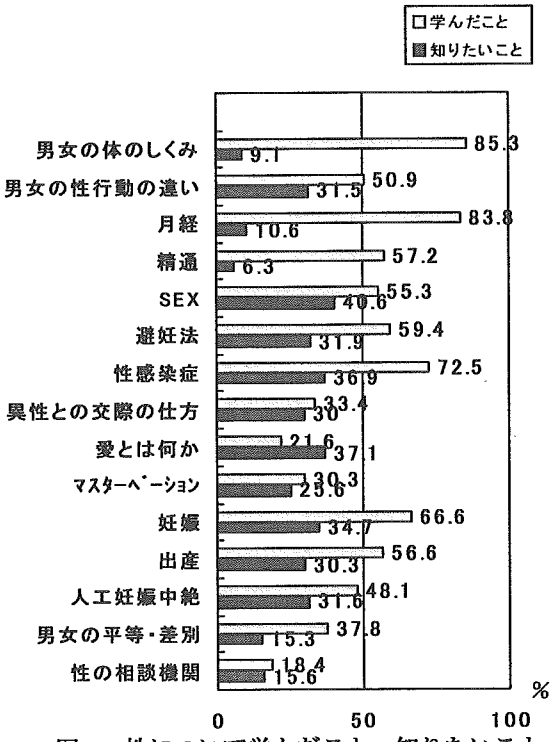

図 4 性について学んだこと・知りたいこと

性に関する知識についての質問では、各質問に対して正しいと思われるものには「○」、違っているものには「×」を記入してもらった。正解回答を 1 点、不正解回答を 0 点とし、その合計得点を算出した。

「コンドームの正しい使い方」は、5 題の質問からなっており、5 点満点であった。平均得点は 4.2(±.92)点であった。正解率をみると「コンドームは 2 枚重ねで使用できる」が 67.0%、次いで「コンドームは女性に挿入する前、勃起したらつける」が 81.1%であった。

「妊娠しない方法」は、4 題の質問からなっており、4 点満点である。平均得点は 3.4(±.77)点であった。正解率をみると「生理終了直後の SEX は妊娠しない」が 76.0%、次いで「前の生理日と次の生理日の中間くらいに SEX すると妊娠しない」が 80.4%で

あった。

「性感染症の知識」は、6題からなっており、6点満点であった。平均得点は、3.8(±1.19)点であった。正解率をみると「キスだけでもうつることがある」が16.6%と最も低く、次いで「エイズ以外の感染症があると、エイズに感染する割合が高くなることもある」「症状がでないことが多い」が60%未満であった。

(5) 性行動

性交経験の有無については、経験あり36.3%(116人：男子22人（55%）、女子94人（34.3%））、経験なし61.9%(198人)であった。女子の性交経験率は、表6の示す通りであった。高校3年生女子の初交経験累積率は、中学1年5.1%、中学2年15.3%、中学3年22.1%、高校1年39.0%、高校2年47.5%、高校3年56.0%であり、いずれの学年においても、2002年度東京都の調査[3]と比べて高かった。(図5)

表6　女子の学年別性交経験率

学年別	性交経験率(%)
中学1年生	3.7
中学2年生	19.4
中学3年生	15.2
高校1年生	38.1
高校2年生	45.3
高校3年生	55.9
その他	29.4

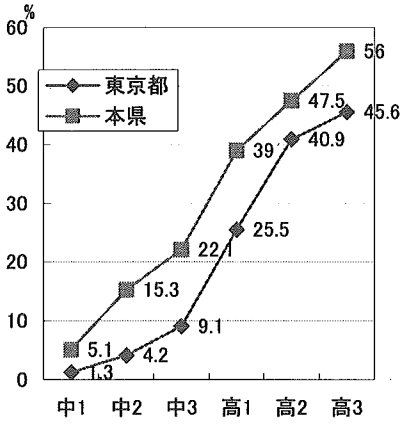

図5　初交経験累積率(高校3年生女子)

今までに何人とのSEX経験があるかについては、「1人」が37.4%(43人)、「2~3人」が29.6%(34人)であり、「10人以上」は8.7%(10人)であった(図6)。

初交時に避妊したか否かについては、「避妊した」が58%(67人)、「避妊しない」が30%(35人)であった(図7)。

性感染症に罹患したことがあるか否かについては、「ある」が6.7%(8人)、「ない」が81.5%(97人)であった。

好きな人からSEXを求められたらSEXするか否かでは、「する」が53%(167人)、「しない」が16%(51人)であった(図8)。「する」としたものを性別で比較すると、男子の「する」と答えたものの割合が女子の「する」と答えたものの割合より有意に高かった($p<0.001$)。

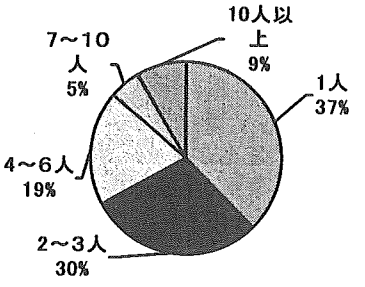

図6　今までのSEXの相手の数（n=115）

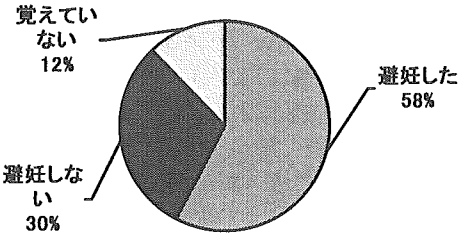

図7　初交時の避妊の有無（n=116）

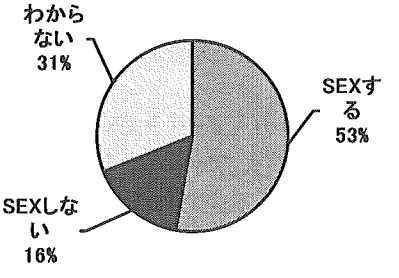

図8　SEXを求められたら（n=316）

また、性交経験の有無で比較すると、性交経験あり群の「する」と答えたものの割合が性交経験なし群の「する」と答えたものの割合より有意に高かった($p<0.001$)。

今妊娠したら産みたいか否かでは、「産む(産んで欲しい)」が28.6%、(90人)、「産まな

い(産んで欲しくない)」が 39.7%(125 人)であった。男女差および性交経験「あり」「なし」による有意差はみられなかった。

人工妊娠中絶の経験は 2.5%(8 人)があり、その内訳は中学生 4 人、高校生 3 人、その他 1 人であった。友人から相談をうけたことのあるものは 16.2%(48 人)あった(図 9)。相談内容は、どこで中絶するか、中絶するか否か、どうしたら良いか、中絶費用について、中絶後の生活、誰に相談するか、将来の妊娠・出産について等であった。

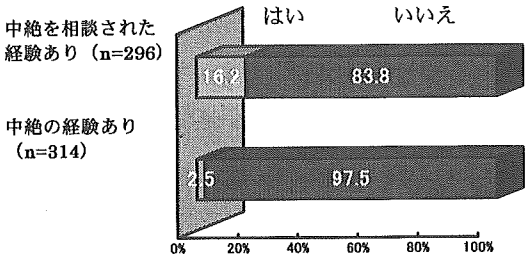

図 9　人工妊娠中絶について

(6) 性に関する相談

「性」に関することで困ったときに相談する人は、1 番目が同性の友達 69.1%(219 人)、母親 11.0%(35 人)、兄弟 3.8%(12 人)の順であり、2 番目は異性の友達 23.2%(65 人)、養護教諭 22.1%(62 人)、同性の友達 16.4%(46 人)であり、3 番目は誰にも相談しないが 24.5%(61 人)、母親 17.7%(44 人)、養護教諭が 16.5%(41 人)であった。

「性」の相談機関の利用状況は、相談したことがないものが 75.9%(243 人)で、あるものは 24.1%(77 人)、あるものの内訳は、保健室 8.1%(26 人)、産婦人科外来 2.8%(9 人)、電話相談 1.3%(4 人)、思春期外来 1.3%(4 人)であった。

専門の相談機関があればよいかについては、はい 71.9%(223 人)、いいえ 28.1%(87 人)であった。

希望する相談方法については、電話相談が 46%(131 人)、直接相談に行くが 36%(104 人)、相談員が学校に来るが 15%(42 人)であった。

相談員の希望は、ピア・サポーターが 37%(120 人)、専門の相談員が 30%(100 人)、医師や助産師・看護師が 27%(89 人)、学校の先生が 5%(16 人)であった。

相談場所の希望は、思春期外来 40.0%(116 人)、病院(産婦人科・泌尿器科)の中 19.0%(55 人)、駅・ショッピングセンター付近 18.6%(54 人)、学校の中 17.9%(52 人)であった。

ピアサポーターによる「性」の講座を受けたいかについて、はい 52.6%(164 人)、いいえ 21.5%(67 人)、わからない 26.0%(81 人)であった。

(7) 記述内容のまとめ

①分析対象：74 人（自由記述質問の回答者）

②対象属性：男子 15 人（20.3%)、女子 59 人（79.7%)、平均年齢 15.7（±2.5）歳

③性交経験の有無

あり：32 人(43.2%)、なし：42 人(56.8%)

④性に関する悩みや意見の自由記述内容

自由記述の回答率は全体の 23.1%であり、性交経験あり群（以下、あり群）の方が性交経験なし群（なし群）よりも回答率が高かった（あり群：27.6%、なし群：21.2%)。

記述内容から 168 の要素が抽出され、11 のカテゴリーと 43 のサブカテゴリーが抽出された。カテゴリーとサブカテゴリーは表 6～7 に示すとおりであった。カテゴリーは大きく 2 つの傾向に分けることができた。A 群は、性についての悩みや疑問、自分自身の性体験についての内容であり、B 群は 10 代の男女の性事情、性教育やサポートシステムについての意見であった。(表 7～8)

内容は以下のような特徴がみられた。(《　》はカテゴリー、〈　〉はサブカテゴリー、『　』は要素を示す)（図 10～16）

・《性についての関心》:〈恋愛・性体験の願望〉として、あり群は『もっと多くの人とやりたい』、なし群は『自分もやってみたいなあって思う』等、セックス願望がみられた。一方で、〈性のことを知らない〉〈性に興味がない〉等の記述があった。

・《性のことについて知りたい》:〈セックスについて知りたい〉は、なし群にのみみられ、その他、欲求不満・マスターベーション・避妊法・月経・妊娠等についてであった。

・《性体験について》：あり群が〈性体験後の感情〉を記述し、『やっぱりいいもんはいい』や『セックスしても何も楽しくない』等と相反する反応がみられた。

・《性についてしっかり考えよう》:『自分で責任をきちんととれるようになってからという考えがあってもよい』等、〈性についての望ましい考え方〉や〈避妊の必要性〉〈中絶はいけない〉等の記述があった。

・《性教育を考えよう》:〈性に関する学校教育

の問題点〉についての記述もあり、『若い人が人工妊娠中絶をしないようにもっと講義したり、思春期教室をひらくべきだ』等、〈性に関する教育のあり方〉についての記述があった。

・《周囲の性事情》：〈セックス経験者が多い〉〈知識が少ない〉等の記述があった。

・《サポートシステムを考えよう》：相談機関や病院への要望の記述が、性交経験の有無に関わらずあった。

表7　抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー（A群）

≪　≫：カテゴリー、＜　＞：サブカテゴリー、（　）内は要素数

≪性についての関心≫ (25)	≪自分自身の性体験≫ (15)
〈恋愛・性体験の願望〉	〈性体験後の感情〉
〈性のことをあまり知らない〉	〈性体験後の心的外傷〉
〈自分が遅れている〉	〈特殊な性体験〉
〈性に興味がない〉	〈セックスの経験がない〉
〈セックスするかしないかの葛藤〉	≪セックスに伴う悩み≫ (13)
≪性のことについての疑問・質問≫ (23)	〈性感染症の不安〉
〈セックスについて知りたい〉	〈不感症についての悩み〉
〈性的欲求・欲求不満について知りたい〉	〈セックス後の妊娠の不安〉
〈マスターベーションについて知りたい〉	≪身体の悩み≫ (8)
〈避妊法について知りたい〉	〈月経不順についての悩み〉
〈月経について知りたい〉	〈性器についての悩み〉
〈妊娠について知りたい〉	≪人間関係の悩み≫ (7)
	〈女性の気持ち・付き合い方がわからない〉
	〈交際を親に打ち明けられない悩み〉
	〈恋愛の悩み〉

表8　抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー（B群）

≪　≫：カテゴリー、＜　＞：サブカテゴリー、（　）内は要素数

≪性についての考え・意見≫ (26)	≪周囲の性事情≫ (14)
〈中絶はいけない〉	〈セックス経験者が多い〉
〈性についての望ましい考え方〉	〈悩んでいる人がいる〉
〈避妊の必要性〉	〈知識が少ない〉
〈性を軽く考えることへの批判〉	〈間違った判断〉
〈売春はいけない〉	〈STDが広がっている〉
〈性に対する気持ちのプラスの変化〉	≪サポートシステムの要望≫ (12)
〈理想と現実とのギャップ〉	〈相談機関の要望〉
≪性教育の現状・意見≫ (16)	〈病院の要望〉
〈性に関する教育のあり方〉	〈中絶するときの条件〉
〈性に関する学校教育の問題点〉	〈情報源への要望〉
	≪性同一性障害・同性愛についての認識≫ (9)
	〈性同一性障害・同性愛の存在〉
	〈性同一性障害・同性愛への関心〉

《性についての関心》

『　』は要素を示す
○　経験なし群女子の回答
●　経験あり群女子の回答
△　経験なし群男子の回答
▲　経験あり群男子の回答

＜恋愛・性体験の願望＞
○『自分もやってみたいなあって思います（セックス）』
●『早く本当に好きな人に出会って愛あるSexをしたい』
▲『もっと多くの人とやりたい』

＜性のことをあまり知らない＞
○『「性」のことは、あまり知らない』
○『下ネタとかやっぱいわかんなくて』

＜自分が遅れている＞
○『自分おくれてる～!?って思っちゃいます』
○『20代は遅いという感じがしてきてあせる』

＜性に興味がない＞
○『別にSEXしたくない』
○『そういう話を友達からされるとひく』

＜セックスするかしないかの葛藤＞
○『妊娠とかなればイヤだし（セックスについて）』
○『けっこう、なやんでます（セックスについて）』

※経験あり群は『もっと多くの人とやりたい』、経験なし群は『自分もやってみたいなあって思う』等、セックス願望がみられた。

※経験なし群女子に、〈性のことを知らない〉ことや〈自分が遅れている〉〈性に興味がない〉等の記述がみられた。

・性についての関心が高く、周囲の影響を受け、焦っている若者像。

・一方で、関心が低く、性についてあまり知らない若者像。

・セックスを軽く考えている者の存在。

図 10　主なカテゴリー（A 群）の内容
《性についての関心》

《性のことについての疑問・質問》

＜セックスについて知りたい＞
○『「SEX」とはきもちいいのか？』
○『同じ年の人はSEXについてどう思っているのか知りたい』
○『Hって10代がすると犯罪なんですかぁ?』

＜性的欲求・欲求不満について知りたい＞
○『男は1度すると、どんどんしたがるのはどうしてか?』
●『どうして男子は女子よりも性的欲求が強いのか』
△『何をやっても理性がおさえられなくなったらどうすればよいか』

＜マスターベーションについて知りたい＞
○『マスターベーションをすることはいけないことなんですか?』
▲『シコシコすれば体力がなくなるのか？』

＜避妊法について知りたい＞
●『外だしは避妊法なんですか？』
●『コンドームの他にも避妊法はあるのですか？』

＜月経について知りたい＞
○『SEXとかじゃなくて生理のこととかをもっとしりたい』

＜妊娠について知りたい＞
○『大人になったら妊娠とかもしなったらのために、妊娠のことなどをもっと知りたい』

※〈セックスについて知りたい〉は、経験なし群女子にのみみられた。

※〈性的欲求・欲求不満について知りたい〉は、性交経験の有無に関わらず女子の記述が多く、男子の性的欲求についての記述であった。

※〈マスターベーションについて知りたい〉は、男女にみられた。

※〈避妊法について知りたい〉は経験あり群女子のみにみられた。

・年齢的・発達段階的に性についての関心が高く、知りたがっている若者像

図 11　主なカテゴリー（A 群）の内容
《性のことについての疑問・質問》

《自分自身の性体験》

＜性体験後の感情＞
●『Sexしても何も楽しくない』
●『男の人は誰でもイイのかなぁと思ってしまいます』
●『「性」ってムズかしいなぁ』
▲『イイものはイイ ただシンケンに』
▲『やっぱりいいもんはいい』

＜性体験後の心的外傷＞
●『うわさになっている。（おかされて）』
△『トラウマというか何というか（同性とのオーラルセックス）』
△『実際誰にも相談できません（同性とのオーラルセックス）』

＜特殊な性体験＞
●『おかされて』
△『男性とのオーラルセックスの経験ならあります』

＜セックスの経験がない＞
○『私は経験がない』

※経験あり群が〈性体験後の感情〉を記述し、『やっぱりいいもんはいい』や『セックスしても何も楽しくない』等と相反する反応がみられた。

※経験あり群女子は性交経験後、マイナスの印象をもち、経験あり群男子はセックス容認の傾向がみられた。

※特殊な性体験をし、悩んでいる者が男女にみられた。

・性交経験後、具体的な悩みを抱える若者像。

・セックスを軽く考えている者の存在。

図 12　主なカテゴリー（A 群）の内容
《自分自身の性体験》

《性教育の現状・意見》

＜性に関する教育のあり方＞
○『イミもなくSEXする人がいなくなるようにもっと中学校でも勉強するべき』
○『保健の授業も他の5教科と同じようにつぶさずにやるべき』
▲『「愛はこういうもの」（ということを教えた上で、避妊方法を教えるべき）』
▲『「SEXは愛を探めるもの」ということを教えた上で、避妊方法を教えるべき』
▲『若い年層の人が人工妊娠中絶をしないようにもっと講義したり、思春期教室を開くべきだ』

＜性に関する学校教育の問題点＞
○『保健の授業では遠回しに言ったり』
○『核心に触れない事があったりする（保健の授業）』
○『SEXなどは、学校でも、なかなか、くわしくやらず』
○『わからなくても、質問するのが、はずかしいふんいき（学校）』

※〈性に関する学校教育の問題点〉についての記述もあり、『若い人が人工妊娠中絶をしないようにもっと講義したり思春期教室をひらくべきだ』等、〈性に関する教育のあり方〉についての記述がみられた。

※経験なし群女子が性教育について多く記述していた。

・性教育の現状を認識し、あるべき姿について考えている若者像。

・女子のほうが性について真剣に考えている？

図 13　主なカテゴリー（B 群）の内容
《性教育の現状・意見》

《性についての考え・意見》

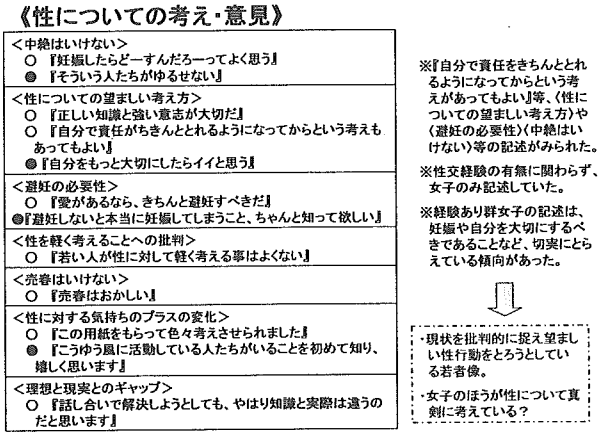

図 14　主なカテゴリー（B 群）の内容
《性についての考え・意見》

《周囲の性事情》

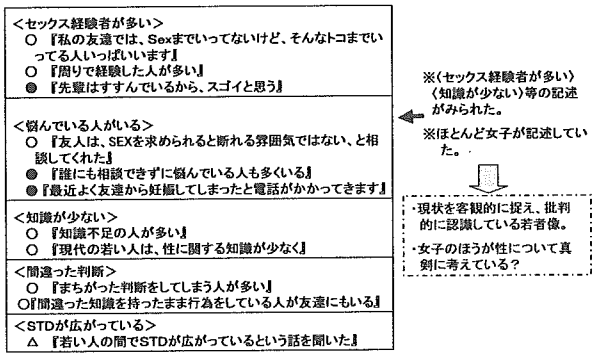

図 15　主なカテゴリー（B 群）の内容
《周囲の性事情》

《サポートシステムの要望》

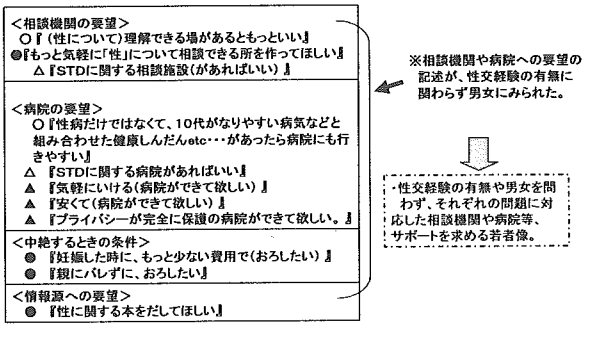

図 16　主なカテゴリー（B 群）の内容
《サポートシステムの要望》

2. 思春期の性に関する活動機関及び関係者間の連携を目的にした活動

1）中学校教諭対象のワークショップ

教育の現場での性に関する現状としては、以下のことが明らかとなった。

①複雑な家庭背景をもった生徒からの相談もあり、対処に苦慮している。

②性や妊娠の成り立ちについての知識がないために、必要以上に妊娠への不安を抱え相談に来る生徒もいる。

③意外な生徒が性の相談をしてくる場合が多い。生徒は正しい知識を求めている。

④高校に入って、興味津々で性交を経験してしまい、悩みを抱える中学卒業生からの相談がよくある。性交に対する知識だけでは不充分で、人間教育(心の教育・自分自身を育てる・意志決定ができる)が必要である。

学校での性教育を進める上での問題点としては、以下の 3 点があげられた。

①保健体育、理科の先生による関わりだけでなく、特別活動や道徳を通しての学級担任との関わりも必要であるが、学級担任の個人差があり、苦労も多い。特定の教諭の負担が大きい上に学校全体の取り組みになりにくく、学校だけでは限界がある。

②保護者なくしては進めていく事ができないため、保護者も交えた話し合いが必要であるが、家庭との連携が難しい。

③性教育の対象となっている中学生を育てている親の教育(母性・父性育て)も大切である。

2）中学校保護者とのワークショップ

家庭における性についての問題としては、以下の 5 点があげられた。

①親世代が中学校の頃は、性教育を詳しく受けていない時代であり、子どもへの性教育の必要性を感じてはいても急にはできない。

②自分なりに性教育を子どもにしても、期待通りに子どもが行動するとは限らない。子どもを諭すために話を聞いたり、一方的に親の価値観を押しつけるのは逆効果である。

③早すぎる教育は逆に刺激を与えてしまうのではないかとの思いから、性について話すタイミングや方法について苦慮している。

④性教育をしても性交をしないとは限らない。避妊法も教えなければならないと思うと抵抗がある。

⑤恋愛感等考え方が相当違う子供達と、どのように接点を持ったらいいのか悩んでいる。

家庭での性教育の進め方についても、体験をもとにした意見が出され、次の 4 点に要約できる。

① 性教育をするには性ということだけ話そうと考えるのでなくコミュニケーションをとりながら入っていくと良い。

②子供が今何を考えているかを同じ目線で傾聴し、受容することが大切である。

③夫婦が協力して見守り、対処法を話し合っ

ていくことが大切である。
④相手を思いやることができるような教育(人間教育)が必要である。

3) 教育・行政・専門機関関係者の懇談会
(H17.8.19)

10 代への性教育に関する連携を目指した教育・行政・専門機関関係者の懇談会では、関係機関それぞれの取り組みの現状や問題点を共通認識とし、今後の具体的な連携に発展させた。

(1) 第1回目の懇談会

教育、行政、医療関係機関 10 人のプレゼンテーションの内容は以下である。
①健康増進センターの保健師:思春期保健教育相談士2名を含む4名の保健師でプロジェクトチームを組み、モデル中学校での性教育やシンポジウムを開催した内容を報告した。
②病院看護部長:平成8年から保健センターで取り組んでいた思春期健康教室の出前講座やそこでのアンケートの結果を報告した。アンケートでは、性について知りたい内容は性感染症、人工妊娠中絶、性交や避妊、妊娠について、身体変化などの順であった。
③県教育庁主事:学校における性教育の目標、基本的な考え方を述べるとともに、医師会と連携して行っている高校で性教育講演会や、性に関するセミナーの内容を報告した。
④保健所保健医長:教育関係者対象に開催している、エイズをめぐる話題から思春期の性に言及する研修会の内容や思春期ピア・カウンセリング活動の支援について報告した。
⑤県健康福祉こどもみらい課:次世代育成支援行動計画の中で思春期保健対策関連事業は 20 行われている。警察本部少年課や義務教育課、男女共同参画課が主体となって事業を行っているが、性教育の地域格差解消や関係機関の連携拡大、性教育人材育成が課題である。
⑥病院医師:青森市 1700 人に行った性の実態アンケートの結果を報告した。セックスに対するハードルが 10 代では他の年代に比べて低いことや性感染症が増加していること、性教育講演の実施率が他市に比して低いこと、ピルの普及率が低いこと、また青森市で唯一実施している思春期メール相談のことなどを発表した。
⑦中学校教頭:弘前市で取り組んでいる性教育について報告した。市の教育委員会で「性教育の手引き」を作成していることや性教育の授業研究会を開催していること、ある中学校での性教育の取り組みを紹介した。
⑧中学校教諭:中学校で取り組んでいる性教育について報告した。中学生への性教育を通して、性交渉に至るハードルの低さ、簡単に中絶を容認してしまう「命」への感覚の軽さ、「できちゃった婚」への高い容認度など、子ども達の性の乱れは「大人たちのあり方への警告」であるとの認識を発表した。
⑨研究者1:本研究会が取り組んでいる性の意識調査やワークショップの開催、学生や保護者への性教育、電話相談の実施、マザークラスの開催などを発表した。
⑩研究者2:本研究会で行っているピアカウンセラーの養成やその活動、10 代の人工妊娠中絶後のカウンセリングについて報告した。

以上のプレゼンテーションから以下の問題点が再認識された。
①学校性教育は高校と中学校の連携がなく断片的で学校間の連携もないのが現状である。
②性教育は命の教育の延長線上にあり必要である、という意識が関係機関で一致していない。
③性教育は教師個人だけではなく学校全体ひいては地域全体での取り組みが継続教育には必要である。

参加者との意見交換を要約すると以下の性教育の目指す方向性が明らかとなった。
①命の教育の延長線上にある 10 代への性教育は必要である、という社会全体の意識の高揚を図る。
②学校性教育の目標は豊かな人間形成であり、性の望ましい価値観の確立や、適切な意思決定や行動選択ができる能力や態度を育てることであるという共通認識を共有する。
③個々の教員だけでなく学校全体で、また家庭や地域で共通理解を図って、理解を得ながら進める。
④中学校間や高校間における縦と横の連携および性教育プログラムなどを作成し、学校格差のない性教育を系統的に、継続的

に繰り返し取り組む。
⑤集団指導や個別指導など多面的に相互に補完しながら取り組む。
⑥関係機関の連携の為に、関係者が継続的に一同に会する場が必要である。
⑦医師、保健師、助産師等性教育の派遣の為の人材バンクを設ける。
⑧性教育は生徒、保護者、指導者へのアプローチと、多岐にわたって展開していく必要がある。

(2) 第2回目の懇談会

教育・行政・専門機関関係者12名と研究者との意見交換から各方面の以下の今後の取り組みが明らかとなった。
①行政では性教育関係予算を来年度から組み入れていくと共に、モデル学校での取り組みや家庭教育学級、校長会、学校保健主事研究会への働きかけを継続、支援強化していく。
②保健所においてエイズ相談と共に研修会開催、思春期ピア・カウンセラー養成を継続し、活動を発展させる。
③教育委員会では、学校保健協議会でさらに性教育の情報を共有し議題として取り上げ、性に関する指導を強化する。
④健康増進センター保健師は、今後3年間で市内の全中学校に性教育を行う。
⑤教育委員会と医師会の連携で県内高校に性教育を今後も継続して行う。
⑥医師による10代中絶者へのピルの普及と保健指導、メール相談を継続する。
⑦日本助産師会青森県支部による、小学校生への性教育プロジェクト活動を継続、発展させる。
⑧青森県看護協会の「思春期応援隊」活動を他の関係機関と連携させる。

以上の各方面の取り組みとともに、関係機関連携のために以下のことを協力および展開することを確認した。
①教育・行政・医療・保護者・地域など10代への性教育に関する連携を目指した研究会「あおもり思春期研究会」を数ヶ月内に発足させる。②「あおもり思春期研究会」で検討したことを県のホームページに載せ、また養護教諭会や学校教育の場などで情報発信するなど幅広く広報・啓発する。

4)「10代の性」ワークショップ

産婦人科医による「思春期の現状と課題」をテーマにした講演が行われた。講演の内容は要約すると以下である。
①外来患者の6人に1人は10代患者である。
②その主訴は月経のことだが、妊娠や避妊、性感染症のことが出てくることが多い。
③妊娠反応を受けに来る患者の40%位は10代である。
④10代の人工妊娠中絶実施は一週間に2人から5人位である。
⑤高校生の2人に1人はセックスを容認しているが、実際に避妊しているのは40%くらいである。
⑥産婦人科医が勧める避妊法はピルと性感染症予防としてコンドームである。
⑦高校生の性教育講演ではクラミジアを中心にエイズのことやタバコなどにまで言及し、「いのちの教育」と捉えている。
⑧10代患者の細胞診でヒトパピローマウイルスに感染している子宮頸癌予備軍が20%いる。
⑨クラミジアは10代後半の患者数と20代の患者数は同じ位である。
⑩駅近くに避妊や性感染症など気軽に相談できるクリニックを開設する。

講演の後、医師、教育関係、行政、保護者、研究会代表との意見交換から以下の意見が出された。
①性教育をヘルスプロモーションという形で行っていくべきである。
②性教育は高校入学前に正しい知識が必要であるが、教師個人では限界があり、家庭、関係機関の協力が必要である。
③養護教諭は、学校で感じる生徒の性の現状と、産婦人科医のデータ上の10代の性の現状は一致する、との認識を持っている。
④学校での性教育では良い性の価値観や出会い、「好き」という気持ちの伝え方、高い自尊感情を持たせる、ということを伝えたい。
⑤中高校生の親にも10代の性の現状やピルの話など成績に関係なく家庭でも話してほしい。
⑥妊娠はファンタジーではない、妊娠すると女子は不利、など将来のことを具体的に話し合う機会が学校でも家庭でも必要である。
⑦学校性教育における統一した性交や避妊の扱いとともに全ての中学校で同じレベルの最低限の性教育をする必要がある。

このワークショップを通じて改めて、学校・保護者・専門家が協力し地域と一体となった活動が10代の性の健全化に結びつく、という課題が明示された。

2. 10 代の人工妊娠中絶を減少させるための活動

1）性教育（対象者別）

（1）中・高校生対象

平成 16 年度結果

内容：

平成 15 年度の調査結果[4]を参考にした。その調査内容では、10 代の男女のほとんどが中学校や高校で性教育を受けていても、「恋愛について」や「男女交際について」等を更に学びたいと答えていた。そこでそれらを中心に構成し、①恋愛について、②セックスおよびセックスの条件、③避妊法、④性感染症（以下 STD と略す）、⑤STD の予防方法を内容とした。

終了後のアンケート結果：

終了後のアンケートには、110 名中 101 名（男子 51 名、女子 50 名）の回答があった。「講義や実技からわかったこと」についての記述式の問いに対しては、「STD について・STD の怖さ」との回答が 24 名と一番多く、続いて「コンドームの大切さ・つけ方」が 16 名、「避妊について・避妊の大切さ」が 12 名、「軽い気持ちで性交を行ってはいけないこと」が 10 名と多かった（図 17）。無回答 10 名、「特になし」の 9 名、「わからなかった」「こんなもんなんだなあ」各 1 名以外の 101 名中 80 名が、性についての何らかの学びを得ていた。

「もっと知りたいと思うこと」についての記述式の問いには、「STD について」が 6 名、「SEX について」が 2 名、「妊娠」「人工妊娠中絶」「避妊法」「安全日」「いろいろ」が各 1 名であり、「特になし」が 72 名、無回答が 17 名であった。

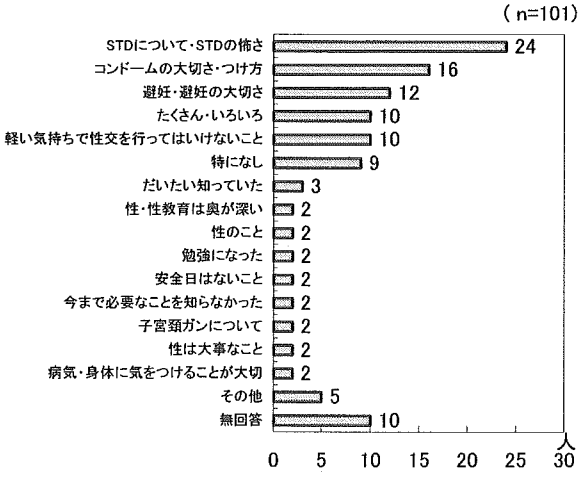

図17　講義や実技からわかったこと

平成 17 年度結果

内容：

平成 16 年度同様、平成 15 年度の本研究班による調査結果[4]を参考にするとともに、各校の希望を確認して調整した。10 代の男女のほとんどが中学校や高校で性教育を受けていても、「恋愛について」や「男女交際について」等を更に学びたいと答えていたという調査結果を踏まえ、また、学校からの要望を確認して、内容を構成した。主に、①命の大切さ、②恋愛について、③セックスおよびセックスの条件、④避妊法、⑤性感染症（以下 STD と略す）、⑥STD の予防方法を内容とした。

B 中学校で行った性教育（B-1：1～2 年生合同、B-2:3 年生対象）終了後のアンケートでは、B-1 が 426 名中 389 名（回収率:91.3%）、B-2 が 201 名中 200 名（回収率：99.5%）の回答があった。B-1、B-2 とも、8～9 割の生徒が「とても良かった」「よかった」と答えた。

B-1 での感想では、「今までみんなが簡単に『死ね』とか『殺すぞ』とか言ってたけど、今日の講演で、命は自分にとって一番の宝です（男子）」「女の人は男の人に『大切にしてほしい』という気持ちがあると聞いて驚きました。自分ではこういう気持ちはおかしいかな？と思ってたけど、みんな心の変化だと聞き少し安心しました（女子）」「男子と女子は、性についての考え方が違うことがわかって有意義だった（男子）」「今日のこのことを生かして、これから命を大切にしていきたいです（女子）」「『性』はエッチなことだとしか考えていなかったけど、生きるためのことだということもわかり勉強になりました（男子）」「その時だけの気持ちで一つの命を作ったり消したりすることは行けないし、もっと命の意味を考えて、世界に一つしかない『自分』とか『命』を大切にして行きたいと思いました（女子）」「男女では性の受け入れ方が違うので、将来子どもを作りたくても、まず相手ときちんと話し合いたい（男子）」等がみられた。

B-2 の感想には、「『生まれただけで 3 億 5 千万分の 1 の勝者だ』という言葉が心に響いた。私たちは生まれただけですごいんだなあ（女子）」「性感染症は、症状が見られないものが多いと聞いて怖いなあと思った。それに 10 代にも感染者が多いのにびっくりした、なので自分はそうならないようにしようと思います（男子）」「感染症や妊娠など私達に

とって怖い話もありましたが、そのようなことも『正しい知識』として知ることができて良かったです。今日学んだことを忘れずにこれからも自分やまわりの人たちも大切にしていきたいです（女子）」「性に興味がわくことは自然のことだということを知った。それから間違った性情報がごく身近にあることも知った。私たちは、周りに流されず少しずつ大人になっていきたい（女子）」「きちんとした知識を持つことが必要だと思いました。性病を防ぐためには、まず自分がきちんとしなければと・・・（女子）」等がみられた。

今後、性教育でどのようなことが聞きたいかの問いには、「命や愛について」「これからの身体の変化について」「性行為・マスターベーション」「性感染症」「妊娠と出産」「男女の心と身体の違い」「異性との付き合い方」等があげられた。

その他、学校独自で生徒にまとめてもらった感想には、生命の大切さや他者への思いやりについて述べるものが多かった。

(2) 保護者対象

平成16年度結果

内容：

青森市では、医師会および健康増進センター等からの外部講師による性教育を年 1 回開催する中学・高校が増えてきた。子どもたちへの性教育に比べて「親への性教育」は手薄となっており、また昨年度の「思春期の子をもつ親との懇談会」でも要望が高かったため、親への支援を中心に、意識的に企画・アピールし、実施した。

平成15年度研究結果[4]を踏まえて、親としての役割や STD・性交経験率等必要な知識に加え、昨年度の10代男女の性に関する調査結果についても情報提供を行うこととし、①性教育は生の教育、②性の意義からみた3つの特質（「生殖性」「快楽性」「連帯性」）、③性の自己決定、④現代の子どもと親の特徴、⑤青森県における10代の性の実態、⑥STDとその予防、⑦ライフサイクルからみた思春期のいる家族の発達課題、⑧子どもとの付き合い方の内容で行った。

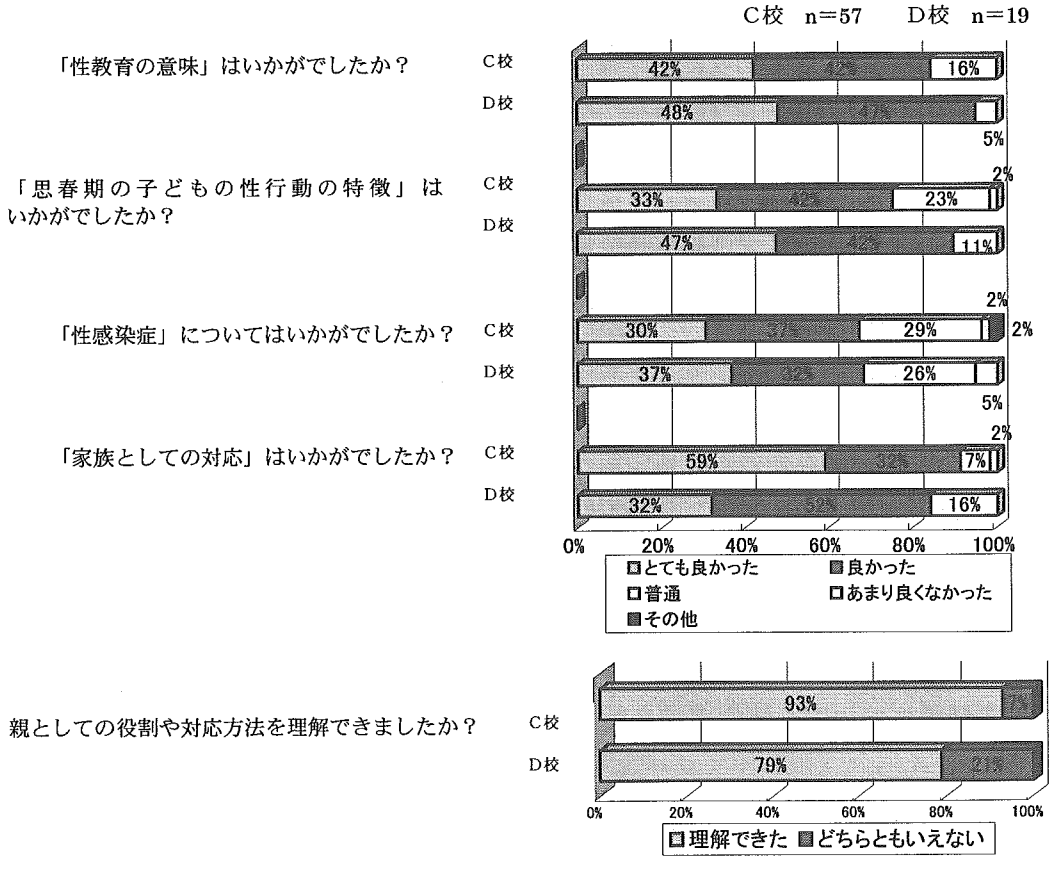

図18　中学生の保護者への性教育後のアンケート結果

講演後のアンケート結果および反応：

C 校と D 校の講演後には内容についてのアンケートを実施した。アンケートは任意の回答であることを説明し配布した。アンケートの回収率は C 校が 71%、D 校が 50%であった。結果（図 18）は、「性教育」については「とても良かった」「良かった」が C 校では 84%、B 校では 95%であった。「思春期の子どもの性行動の特徴」については、「とても良かった」「良かった」が C 校では 75%、D 校では 89%であり、保護者からは「県内の 10 代男女の性経験率が高いことに驚きました」とのコメントが記載されていた。「性感染症」については、「とても良かった」「良かった」が C 校では 67%、D 校では 69%であり、「性感染症の感染経路や症状についてもっと知りたい」「理解していない父兄が多いと思う。性感染症の内容にもっと重点をおいて欲しい」との意見が記載されていた。「家族としての対応」については、「とても良かった」「良かった」が C 校では 91%、D 校では 85%であった。「親としての役割や対応の方法」については、「理解できた」が C 校では 93%、D 校では 79%であり、「子ども・夫婦のすべての人間関係にコミュニケーションが大切だとわかった」、「子どもを評価していることがわかった。相手の気持ちになって話すことに効果があることが良くわかった」との意見が記載されていた。

講演後のフリーディスカッションでは、それぞれの家庭で様々な個別の問題を抱えていることや、1 回で終わらず今後も性や思春期の子育てについて学んでいきたいという要望が活発に話された。

平成 17 年度結果

内容：

平成 15 年度の「思春期の子をもつ親との懇談会」において親への性教育の要望が高かったため、昨年度に引き続き企画・アピールし、実施した。

平成 15 度研究結果[4] を踏まえて、親としての役割や STD・性交経験率等必要な知識に加え、平成 15 年度の 10 代男女の性に関する調査結果についても情報提供を行うこととした。

講演後の反応：

講演後のフリーディスカッションでは、「もっと多くの親たちに聞かせたい」「男の子の性の実態についてももっと教えてほしい」等の感想が聞かれた。講師が講演をしていて反応が良かったと感じられたのは、「性行為の意味」および「性に関する科学的なデータ」についてであった。

（3）医療保健従事者・養護教諭対象

内容：

10 代の男女を支援していくことができるよう、思春期の性についての基本的なこと、性的虐待や DV など異常を察知するための知識、自分自身の性をみつめるための内容などそれぞれの職種に合わせた内容を構成した。

講演後の反応：

それぞれ反応は概ね良好であり、看護師・助産師対象の研修会後は、その内容も取り入れて、小・中学校への性教育活動を活発化させている。

また、もっと多くの人に聞かせたいと、受講後資料を持ち帰り、コピーを同僚に渡す者もいた。保護者と同様、「性行為の意味」および「性に関する科学的なデータ」については特に興味深く聞いていた。

2）ピア・カウンセリング

（1）県立 A 高校「性教育講座」グループワーク担当（高校 1 年生男女対象）

実施後のアンケートでは、『ピア・カウンセラーの説明』が「よく理解できた」と「理解できた」を合わせると、平成 16 年度は 60%、平成 17 年度は 81%となっていた。（図 19）『自分の意見を話しやすかったか』は、「とても話しやすい」と「話しやすい」を合わせると、平成 16 年度は 18%、平成 17 年度は 48%となっていた。（図 20）『今後もピア・カウンセラーに相談したいと思うか』は、「是非相談したい」と「相談をしたい」を合わせると、平成 16 年度は 30%、平成 17 年度は 38%となっていた。（図 21）いずれの項目もピア活動初年度の平成 16 年度より、17 年度の方が肯定的な意見が多い結果となっていた。

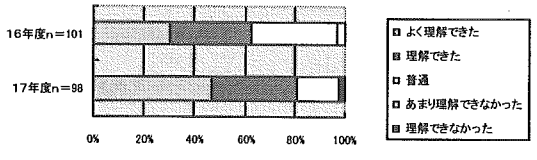

図 19　ピア・カウンセラーの説明は理解できたか

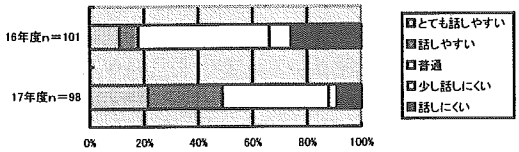

図 20　自分の意見を話しやすかったか

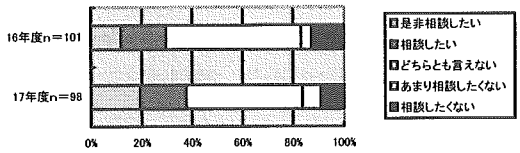

図 21　今後もピアサポーターに相談したいと思うか

(2) ピア・カウンセリングルームでのピア活動

①大学祭でのピア・カウンセリングルーム

大学祭には地域の子どもから老人までの幅広い年齢層が集まったが、10 代の参加者自体が他の年代に比べて少なく、また入り口でのぞくだけで、入らずに帰る人が多かった。しかし、来訪者は展示物を見たり、ピア・カウンセラーの話を聞いたり、質問をしたり 15～30 分程度、ピア・カウンセラーと関わりをもっていた。

②学外でのピア・カウンセリングルーム

開設した 1 週間で参加した中高生は 7 名で、中学生 4 名、高校生 3 名、すべて女子であった。いずれも 2～3 名ずつのグループでの参加であり（3 グループ）、個別相談の参加者はなかった。その他、本学以外で養成されたピア・カウンセラー6 名が情報交換に参加した。

中高生の参加者のうち、参加目的が明確だったのは、1 グループであり、「ピル・STD について知りたい」「恋愛について相談したい」であった。他の 2 グループの参加目的は口頭では確認できなかったが、いずれのグループもピア・カウンセラーによる恋愛や性についての説明を聞いた後、自分自身や友達の恋愛や性について話したり質問したりした。所要時間は 1 グループにつき 1 時間～1 時間 30 分であった。参加者からは表 9 のような質問がみられた。また、ブースの展示品を見たり、ピア・カウンセラーと話すうちに、身の周りの性意識・性行動について、表 10 のような発言がみられた。参加者の反応としては、参加目的を話したグループからは、「話を聞くよりも展示してあるものを見た方が勉強になる」「すごい勉強になった」「友達を連れてきたい」との明確な反応がみられた。他の 2 グループについては、一方は、援助交際などについてあっけらかんと話すグループで、もう一方は何を話したいのか把握しづらいグループであり、ピア・カウンセラーは対応に苦慮していたが、パンフレットや展示物を使って、参加者の発言を引き出すことができた。

尚、この活動は新聞や雑誌等に掲載され、青森市家庭教育支援総合推進事業（文部科学省からの委託事業）・県こどもみらい課・青森市男女共同参画をすすめる会・中学・高校等と連携したピア・カウンセリングの開催の希望が寄せられた。

表 9　ピア・カウンセリングルームに参加した中高生からの質問

- 彼に（避妊について）任せっきりにしないってどういうこと？
- どうして男の子ってエッチしたがるの？
- コンドーム以外にどんな避妊法があるの？
- なんでセフレとかつくるの？
- 彼がエッチを求めてくるとかしたらどうすればいいの？
- なんで男の人ってコンドームつけたがらないの？
- 緊急避妊薬っていくらで手に入るの？
- ピルって副作用ある？
- DV って？
- 初体験の年齢はいつですか？
- 彼氏いますか？

表 10　ピア・カウンセリングルームに参加した中高生の発言

- （昨年度調査による性交経験率に対して）みんなもっと経験してるよ。
- クラスで半分くらいは経験があるよ。（中学生）
- クラスによって経験の差は大きいよ。
- 生理が遅れたときに保健室に妊娠したかもって普通に相談できた。
- 出会い系とかで会って付き合ってる人とかいるよ。
- 処女を売ると高いとか聞いた。
- 売春してる子もいるよ。

3) 電話相談

平成 17 年 2 月の開設から平成 18 年 2 月までの相談件数は 49 件、平均は約 3.8 件/月であった。1 回の相談時間は 10 分未満が最も多く 21 件であり、10～19 分が 11 件、20～29 件が 8 件、30 分以上が 9 件であった。相談者の性別では男子が 35 件、女子が 13 件、不明が 1 件であった。また、年齢では 13～15 歳と 16～18 歳が最も多く 11 件であり、10 代の親世代にあたる 40～50 代からの

相談も6件あった。相談内容では、性器の形や包茎等の身体に関する内容が18件と最も多く、次いでマスターベーションが13件であり、その他月経、男女交際、性感染症等の内容であった。

4) 人工妊娠中絶後のカウンセリング

人工妊娠中絶後の不安やショックの緩和、人工妊娠中絶の繰り返し防止のために、本研究メンバーによる人工妊娠中絶後のカウンセリングを行った。カウンセリングの実施日は、人工妊娠中絶後に外来で診察を受ける7～10日目に設定した。

カウンセリングを行ったのは4件で、高校生3名、短大生1名であった。4件のカウンセリングにより、次の傾向が明らかとなった。①中学校からの性交経験、複数の相手との性交経験がある。②避妊の知識不足や避妊をパートナーに協力してもらえずに性交し、避妊に失敗している。③妊娠したことをパートナーや親・友達等に相談しており、本人の意思または相談者にすすめられて人工妊娠中絶を決断している。
④本人またはパートナーに産みたい（産んで欲しい）気持ちがあっても、学業継続や経済的理由のために断念している。⑤人工妊娠中絶後もパートナーとの交際を希望している。⑥人工妊娠中絶したことを悲しんでおり、その後の生活に不安を抱えている。カウンセリング後のアンケートには、2名から回答があり、再度カウンセリングを受けたいとの要望が寄せられた。

5) ヤングママのためのマザークラス

(1) 参加者は延べ人数62名（夫や子供を含む）、1回平均6.2名であった。また、参加者の年齢は17～26歳であった。（表11）

表11　マザークラスの参加者一覧

	月日	参加者数
第1回	5/28	妊婦4名、ママ2名、夫1名、子ども2名
第2回	6/18	妊婦1名、ママ1名、子ども1名
第3回	7/30	妊婦2名、ママ2名、子ども2名
第4回	8/27	妊婦1名、ママ1名、子ども1名
第5回	9/17	妊婦2名、ママ2名、子ども2名
第6回	10/22	ママ1名、子ども1名
第7回	11/12	妊婦1名、ママ2名、子ども2名
第8回	12/17	妊婦1名、ママ3名、夫1名、子ども4名
第9回	1/28	妊婦1名、ママ4名、夫1名、子ども4名
第10回	2/18	ママ4名、子ども5名

(2) おしゃべりタイム・質問タイムの内容

第1回：産後の職場復帰について（復職するかどうか、復職後の大変さについてなど）、夫の分娩立会いについて、日常生活でできる簡単なエクササイズについて
第2回：腰痛に効くエクササイズについて、妊婦健診時の超音波検査、ビデオ録画について
第3回：病院の母親学級の内容について、育児について（夜中の授乳、離乳食について）、肩こりに効くエクササイズについて
第4回：母乳育児について（前回の経験、妊娠中の乳房の手当て）、マザークラスのエクササイズが夫婦の話題になっていること、離乳食について（回数、与え方）
第5回：分娩室の環境について（LDR、分娩台について）、産褥入院中の環境について、夜中の授乳が多いこと
第6回：子どもが1歳過ぎてからの母乳を与えることについて、離乳食について（考慮するべき栄養は何か）、
第7回：分娩に役立つエクササイズ、ベビーエクササイズの実演、
第8回：母乳の継続について、分娩の報告、こどものいたずらについて
第9回：産後に役立ったグッズについて、妊娠中やお産の時に夫にして欲しいこと
第10回：これからやりたいと思っていること、今後の活動について

(3) 終了後アンケート結果

①マザークラスの時間（土曜の午後・90分）について
良かった：26名
理由：・おっぱいの時間にちょうど運動の効果がでて、よく出てくれると思う。一日で一番暑い時間に涼しくすごせる。
・時間的にもちょうどいい。
・必ず家に人がいる時間だから。
・ほどよい疲れ具合だから。
・涼しくなる時間だから。
・1番動きやすい時間で主人も参加してくれるから。
②エクササイズについて
良かった：26名
理由：・常に猫背なのでさっぱりできる。
・肩こりなどによく効いた。
・いい運動になった。
・体を動かせるから。
・普段は体を固まらせて過ごしているので、さっぱりする。